

上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析

- 雑談の場での経験談の談話指導に向けて -

木田真理・小玉安恵

〔キーワード〕 上級日本語学習者、口頭ナラティブ能力、経験談、評価装置、滞日経験

〔目次〕

1. 先行研究
 - 1.1 ナラティブとは何か
 - 1.2 日本語母語話者の口頭ナラティブ能力について
 - 1.3 評価装置とは何か
 2. 調査方法
 - 2.1 調査の対象
 - 2.2 調査の方法
 - 2.3 授業内容
 - 2.3.1 授業目的
 - 2.3.2 授業の流れと教室活動
 3. 結果
 - 3.1 上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力についての概観
 - 3.2 ケーススタディ
 - 3.2.1 滞日経験1ヶ月の研修生の場合
 - 3.2.2 滞日経験4年の研修生の場合
 - 3.2.3 滞日経験20年の研修生の場合
 4. 考察
- おわりに

はじめに

日本語国際センターの海外日本語教師短期研修では、研修生の総合的な日本語運用力の向上をはかるべく、四技能統合型トピックシラバス（以後、総合日本語）を使った日本語学習プログラムを提供している。その中でも、特に、研修開始時に実施するプレースメントテスト¹⁾で超級と認定される学習者を含む最上位クラスの日本語学習に対しては、この総合日本

語の授業において、何をすべきか、また何ができるのかは、常に試行錯誤の中で行われてきた。今までに最上位クラスの総合日本語の授業で取り上げられたトピック例としては、家族、教育、環境、労働、異文化、交際などがあり、ビデオや新聞記事などの生教材を使って、四技能の更なる向上と日本社会に関する最新の知識の獲得を目指して授業が行われている。今までのところ、どのトピックも日本社会の重い課題を題材としたものが多く、教室活動としても、ディスカッション、ディベート、インタビュー、発表、スピーチといったフォーマルな言語活動や、意見文や投稿記事を書く活動のように文章語に焦点を当てた活動などが中心であった。そこで、通常扱われるトピックとは異なる新たなトピック「言葉と文化」を設定し、楽しい話題で、かつインフォーマルな言語面に重きを置いた上級者向けの総合日本語の授業を試みることにした。具体的には、日本の言葉遊び、特にユーモラスな話でよく「落ち」として日本人が用いる「だじゃれ」と、面白い経験談を語るという活動を取り上げた。経験談は日常的な言語活動でありながら、聞き手をひきつけつつ、しかもわかりやすく話すためには、話全体の構成や細部の言語的なテクニックなどへの気配りが必要とされ、案外難しい。そのため、上級日本語学習者の興味やニーズも高いと予想された。

また、日本語母語話者が日常的な経験を語る際、談話構造及び運用面でどのような能力を持っているか(以後、口頭ナラティブ能力)の解明も徐々に進みつつある。(櫻井1996、Takahashi 1996、Okazaki 1995など)。しかし、準備を進めるうちに、上級日本語学習者がどの程度の口頭ナラティブ能力をもっているのかがはっきりしないため、授業でどのようなインプットをすべきなのかが決められないという矛盾にぶつかった。学習者の口頭ナラティブ能力を評価する基準は、従来プレースメントテストとして行われてきたOPIや筆記試験などでは明文化されておらず、能力の高低を測りにくいからである。また、学習者の口頭ナラティブ能力を、授業中のインプットで向上させることができるかという疑問もあった。そこで、本研究は、パイロットスタディとして、最上位クラスの上級日本語学習者が、指導前の時点でどのような口頭ナラティブ能力を獲得しているのかということ、また、その後の教師側からのインプットにより学習者のナラティブがどのように変化するのかという二点を明らかにすることを目的とした。

1. 先行研究

1.1 ナラティブとは何か

Gulich & Quasthoff(1985)によりまとめられているナラティブに関する様々な定義をみると、ナラティブを定義するために以下の四点が争点になっていることがわかる。

上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析

- 1) 語っているときよりも過去の出来事であるかどうか
- 2) 実際に起こったことかどうか
- 3) 語り手とナラティブ中の登場人物との関係はどうか
- 4) 語るに値するかどうか (reportability, quality of being out of ordinary)

本研究で取り上げるナラティブは、自分の身の回りにおこった面白い経験談であるので、「語り手自身に、実際に起こった、語るに値する、過去の出来事である」と定義できると思われる。また、本研究では、雑談の中に現れるナラティブを想定しており、口頭ナラティブ能力を、会話能力の一部として考えたい。

1.2 日本語母語話者の口頭ナラティブ能力について

第二言語習得の分野における日本語学習者の日本語での口頭ナラティブ能力についての研究は、管見ではまだ見当たらない。しかし、社会言語学の分野では、まず、第一言語習得の観点による櫻井(1996)がある。櫻井はフログストーリーといわれる絵を見せ、子供から大人までの日本人被験者に口語で語らせたナラティブを時制の使用の発達という観点から分析している。また、変異分析では、成人の口頭ナラティブの中での歴史的現在形(過去におこった出来事を現在形で表すこと、Historical Present以下HP)や直接引用の使われ方を取り上げた松村(1995⁹⁾や小玉(1998)、否定を取り上げたYamada(2000)などがある。さらに、インターアクションの社会言語学では、同じく成人ナラティブ内のHPや直接引用を取り上げているTakahashi(1996)や省略を取り上げたOkazaki(1995)などがある。変異分析では、話の内容に濃淡をつける言語的な評価装置(evaluative device⁹⁾)という観点で、インターアクションの社会言語学では、ナラティブ内の出来事や聞き手に対する感情的な関わりの方策(involverment strategy)という観点で、上記にあげたそれぞれの言語現象に注目している。本研究では、前者の言語的な評価装置という観点から学習者の口頭ナラティブ能力の分析を試みるため、以下、評価装置という概念について説明する。

1.3 評価装置とは何か

評価装置とは、話し手が話の内容に相対的な重要性の差異をつけるための装置で、話し手がその内容に対する態度や感情を伝えることによってその機能が果たされる(Schiffrin1981)、その結果、聞き手は話が理解しやすくなったり、話の要所所で、ひきつけられたりする。しかし、評価装置は、過剰使用されるとその機能を失う(Polanyi 1985)、つまり、音楽の演奏もピアノッシモがあるからこそフォルテッシモが際立つのであり、評価装置も話の展開上、

適切だと思われる箇所にものみ使用されるべきものである。また、評価装置は、あらゆる言語に共通するものもあれば、それぞれの言語の持つ特徴に応じて独自のものもある。例えば、直接引用などは、どの言語にもある評価装置であると思われるが、HPなどは、時制のない中国語などではありえない。また、その使用は、決してランダムではないが、話し手の任意であるため、使用されないからといって誤りというわけではない。平たんで単調な話になってしまうというだけである。さらに、ある一つの評価装置の使用を分析するには、音声面も含めたその他の評価装置の分布も視野に入れた総合的な判断が必要である（Schiffrin1981）。つまり、ある一つの言語的な評価装置が、あるナラティブ内で使用されていなかったからといって、そのナラティブが単調になるわけではなく、その話の構成や展開というマクロの構造と、その他の様々な評価装置との関係を、できるだけ総合的に記述する必要がある。今後、質的にも量的にもそれらを総合的に記述する研究が望まれる。

2. 調査方法

2.1 調査の対象

当センターの2000年度夏期短期研修の中で最も運用力の高い5クラスの総合日本語授業において、口頭ナラティブ指導の授業を試みた。研修生11名のプロフィールは表1のとおりである。

表1 研修生概要

性別	男性：2	女性：9			
年齢	20代：2	30代：4	40代：2	50代：3	
国籍	ブラジル：2	ネパール：1	タイ：2	キルギスタン：1	マレーシア：3
		ルーマニア：1	フランス：1		
筆記試験結果 ⁽⁴⁾	90%以上：4	80～89%：4	70～79%：3		
OPI	超：3	上上：3	上中：3	上下：1	中上：1
滞在経験	なし：1	1ヶ月以内：2	6ヶ月～1年：3	4～5年：4	10年以上：1

来日時のプレースメントテストで、OPIの判定「中上」が1名いるものの、10名は上級以上であり、また筆記試験においても日本語能力試験の2級相当問題において正答率が80%以上の研修生が8名おり、日本語学習者としては、上級のクラスと言える。

2.2 調査の方法

1.2で述べたように、話のクライマックスや展開場面で頻繁に現れる言語的な評価装置とし

上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析

ては、HPや擬音語・擬態語、直接引用、否定以外にも数多くあるが、今回は限られた授業時間内での指導であるため、HPと擬音語・擬態語、そして既存の研究では指摘されていない、「～たら」や「そしたら」などの接続表現（Kodama 2000⁹⁾）を加え、インプットした。この3点に的を絞った理由は、直接引用は、どの国の言語にも存在する使用頻度の高い評価装置であるため、自然に出てくることが考えられ、このレベルで指導する必要性は低いと考えられたからである。また、HPも様々な言語で頻繁に用いられる評価装置であるが、ネイティブでもその使用や存在はまったく意識されておらず、学習者には文法的な誤りとして捉えられていることも多いので、学習者に対しては、意識化させる必要があると思われた。一方、擬音語・擬態語や「たら」は、使用頻度が高い上、日本語独特の評価装置であり、指導の必要性があると思われた。以下に、これら3つの評価装置が学習者に対してどのようなものとして説明されたかを示す。

- a. 過去に起こった出来事があたかも目の前で起こっているかのような臨場感をかもし出したり、出来事に対する話者の驚きなどの感情的な要素を伝えるために用いられるHP
- b. 語られる内容を直接感覚に訴えることで、より臨場感を醸し出す擬音語・擬態語
- c. 話者の直接体験や意外性を表す接続詞「たら/そしたら」

さらに、授業においては、研修生に評価装置をインプットする際、日本人の口頭ナラティブのサンプルとして「分析サンプル：ネコかぶり」を提示した。このサンプルは、日本語母語話者のナラティブ⁶⁾で、評価装置a.b.c.が使われており、ナラティブの長さも適当である。また、このサンプルデータの「落ち」は、「だじゃれ」で終わっているという点からいっても、今回の授業でのインプットに最適と判断し、音声テープで談話を聞かせるとともに以下のトランスクリプションを研修生に提示した。

分析サンプル：ネコかぶり

凡例：@@@ = 笑い、下線 = 強調されている部分、網掛け = インプット項目

話し手	聞き手
I: あのね、うちも一匹ねこがいるのよ。	H: (ネコの鳴きまね)
I: ニャータって言って、 もう15になるんだけど。	H: (ネコの鳴きまね)
I: そいで、その、あーん (聞き手のちょっかいに対して)	@@@@@
I: そいで、あのーうちの子がかわいがってんの、とつてもね。 そいで、もうある時ね、あのうちの子がね、	

「あんまりこいつがかわいいから、
こいつがいなくなった時のことをね、
あのーたえられないから、

H: うん

I: その前に、子猫を飼って、
あのーかわいがって、
それを育てて、

こいつがいなくなっても、
そのー寂しさに耐えられるように
衝撃に耐えられるように
子猫を飼いたい」

って言い出したの、うちの子が。
ほしたらね、ある時私が寝てたら、
子供が部屋にとんとんって入ってきて
「ニャータが大変なの」って言うのね。

H: うん。

I: そしたら、「この猫はもう白内障で年取って
目がほとんど見えないって言われた」って言うの。

H: ニャータがですか。

I: ニャータが。

H: ニャータが。

I: うん。

ほいで、よくニャータの顔をこう見たら、
こんなかわいい顔してるんだけど、
目がバーッって開いたっきり、
どう孔が開きっぱなしなのよ。

H: あー。

I: ほいで、あんまりのことにうちの子ね、
ニャータの目が見えなくなって
もうちっちゃい猫のことは忘れて、
「もうあれはいらないわ」って「ニャータを可愛がるわ」って
言って。

お医者さんにも相談したら、
あの、ちっちゃい猫を飼うと、
年とった猫って僻んだり、すねたり、嫉妬したりしてね、

H: あー

上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析

I: 大変なことになるんですって。

H: はいはいはいはい

I: いなくなっちゃったりするんですって。

H: そうですってね。

I: だから、「ちっちゃい猫のことあきらめるわ」って言ったの。

と、しばらくしたら、

ニャータのどう孔がニョーっと狭くなって

もう全然、一階から三階までパーッってかけおりて、

がけ、下ったりなんかしてるの。

H: へーわかったんですかね。

I: ねこかぶってたの。

H: えっ、えー
@@@@@。

2.3 授業内容

次に授業内容について記す。

調査対象クラスでは、研修期間中、「異文化・自国と日本」「交際」「教育」「労働」「言葉と文化」「自然・環境」の6つのトピックで総合日本語の授業が行なわれた。そのうち、すでに保持している口頭ナラティブ能力の調査及び授業でのインプット後の変化を調べたのは、「言葉と文化」(3時間×3回、合計9時間)の授業である。以下に当該トピックの授業の目的、実際の授業の流れ及び教室活動を記す。

2.3.1 授業目的

授業の目的として、次の4つを設定した。

- ・ことばの専門家として、日本語を様々な角度から分析する。
- ・ことば遊びを通して日本文化を知る。
- ・聞き手をひきつける効果的な話し方の分析をする。
- ・効果的な話し方の言語的特徴を意識しながら経験談を話してみる。

2.3.2 授業の流れと教室活動

授業の流れは5段階に分けられるが、紙面の都合上、口頭ナラティブの指導に関するものを中心に記す。

一日目

ウォーミングアップ(言葉の面白さに注目させる活動)

様々な言葉遊びの具体例を出し合い、だじゃれやしりとりや回文などをインターネットで検索することを課題とする。

言葉遊びの中でも特に「だじゃれ」に焦点をあて、テレビ番組(日本TV)「笑点」の「大喜利」のビデオを視聴させる。この番組は、日本の伝統的な言葉遊びの技術を落語家達が競い合うもので、この回は、「水は英語でウォーター、お湯はわいたー」この要領で言葉遊びをするというものであった。社会常識が前提になっているものや、個人名や土地の名前などの固有名詞が題材となっているものは、解説が必要であったが、概ねネイティブに近い理解を示し、視聴中も笑いが絶えなかった。視聴後、これと同じ課題を宿題とし、2日目の授業で披露するよう指示した。⁽⁷⁾

経験談の披露のモデルを示す。

インフォーマルな場所で友人や家族に、自分の面白い経験を話したい時、どのように話すか、聞き手をひきつける話し方の技術について考えてみるよう指示し、講師が自ら経験談のモデルを示した。なるべく雑談の雰囲気が出るように、研修生に近づいて座り、足を組み、リラックスした雰囲気を演出する工夫をした。モデル提示のあと、面白い話、ちょっとユーモラスな話、珍しい話、「落ち」のある話などを友達や家族に話すような感じで原稿を書かずに録音してくるよう指示した。

二日目

口頭ナラティブにおける評価装置のインプット

効果的な話し方(より自然で聞き手をひきつける)の指導として、日本人の口頭ナラティブの例(2.2のサンプルデータ参照)を提示し、分析サンプルのトランスクリプションから、「話し言葉の特徴が現れているところ」「面白いと思った所」「意外だと思った所」「この話のクライマックスだと思った所」について指摘させる。

次に、上記の指示で指摘された個所で、どのような評価装置(2.2参照)が現れるかを考えさせ、講師側から、サンプルデータ内でどのように評価装置(研修生には、言語的特徴という表現で示した)が使われているか、また、それぞれの項目を使用する場合としない場合で、どのようなニュアンスの違いがあるかを説明した。さらに課題として、1日目の宿題であった自分の経験後の録音を聞き、評価装置の使用が適当な部分は極力使って経験談を再構成すること、変更部分に関するメモを書くことを課した。

三日目

研修生による経験談の披露

研修生の方からビデオ撮りの希望が出たため、録音に加え録画もすることになったが、な

上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析

るべく緊張をとき、雑談の雰囲気を出すため、机を小さく並べリラックスできる雰囲気を作って、順番に発表させた。発表後、クラス全体の口頭ナラティブに関するコメントや経験に対する感想、及び各研修生の経験談に対するコメント（文法面、口語面、口頭ナラティブ面、感想など）を紙面にてフィードバックしたものと、全員の発表を録画したビデオを研修生に渡した。

以上、授業の流れと教室活動について報告した。次に、研修生の口頭ナラティブ能力の分析結果について記す。

3. 結果

3.1 上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力についての概観

2.2で述べた3つの評価装置をインプットする前に録音された経験談（宿題として録音テープで提出された経験談）と、インプット後にクラスで披露された経験談に、どのような傾向があったか、まず全体の傾向を概観する。

インプット前の研修生11名の全体的な傾向としては、評価装置の適切な使用の指導以前に、まず口語会話全般に関する指導の必要性を実感した。すなわち、日常生活の中のインフォーマルな場面である雑談において経験談を披露するという場合は、くだけた会話表現[®]で会話が行われるのが自然であるが、大半の研修生が「です・ます体」（敬体）で話しており、フォーマルなスピーチのようであった。また、くだけた表現で話そうとしている研修生の場合も、文体が不統一であったり、文法的な誤用も多く見られ、まずインフォーマルな会話に特有の表現、文と文の接続方法などの口語会話全体についてのルールの指導が必要であると痛感した。

指導前の口頭ナラティブ能力に関しては、ほとんどの研修生に、評価装置の知識がなく、ほとんど使用もされていない傾向が認められた。評価装置の説明の後、HPに関してその知識を問うたところ、母国語での存在を知っていた研修生が2名（フランス語とロシア語）で、あとは全く初めて聞く知識のようであった。中には、今までは自然にHPが会話中に出てしまっても、誤用と考え、わざわざ過去形に言いなおしていたというコメントもあった。このように、評価装置の使用は研修生の過去の日本語学習ではとりあげられたことがなく、訓練の経験もないようであった。ただ、滞日経験の長い研修生の場合、評価装置の使用がインプット前から観察されたり、インプット後の変化が顕著であったりして、OPIや筆記試験の結果よりは、滞日経験に口頭ナラティブ能力との相関関係があるように思われた。

そこで、11名の研修生の滞日経験年数（表1参照）に注目し、滞日経験1ヶ月以下と4年と20

年の研修生のケースの中で、ナラティブの内容に誤解が生じにくいナラティブを取り上げ、それぞれ詳細な分析を行うこととした。その分析結果である研修生の経験談のデータは47頁以降の表2～7にあげた。この表ではそれぞれの指導前と指導後のナラティブを、節ごとにわけて通し番号を左欄に記し、インプットした3つの評価装置のうち、全体的に出現回数の多かった「たら/そしたら」とHPが使用されている節の右欄には、*のマークを付した。もう一つのインプット項目である擬音語・擬態語は、出現回数が少なかったため表には記載しなかった。これは、「たら」やHPが話の展開に密接に関わっているのに対し、擬音語・擬態語は、話の展開というよりは内容によって使いやすいナラティブと使いにくいナラティブがあるためだと思われる。次に異なる3タイプの滞日経験を持つ研修生の、インプット前の口頭ナラティブ能力の特徴や、インプット後の経験談における言語的特徴の分析結果を記す。

3.2 ケーススタディ

3.2.1 滞日経験1ヶ月以下の研修生の場合（OPI：上中 筆記2級：83%）

1997年に3週間の滞日経験がある研修生の場合、指導前の言語的評価装置の使用はゼロと言っていていいであろう。「たら/そしたら」、HP、擬音語・擬態語のどの項目の使用もなかった。（巻末表2参照）また、文法あるいは語用論的な誤り（表2/節番号21、34～35、38参照）もいくつか観察された。指導後の発表でも、やはり文法、語用論的な誤り（表3/節番号38、44、48参照）は見受けられた。節の数は47から51に増えているものの、文末がいずれも「～ました。」「～でした。」に限られ、くだけた会話表現は全く見られなかった。評価装置としては、HPが指導後に一箇所使用されている。しかし、擬音語・擬態語に関しては、使用すれば効果的な部分（波の音など）も想定できるが、指導後も一切使用されていなかった。また、「たら」も使用にふさわしい箇所が何箇所か想定できるが（表3/節番号18～20、22～23など）全く使用されておらず、単調な印象のままのナラティブにとどまっている。

しかしながら、インプット項目ではなかったが、指導後の変化という点では、評価装置の一つである「直接引用」⁹⁾が指導前では1箇所（表2/節番号29）だったのに対し、指導後は2箇所（表3/節番号40、43）に増えていたという点があげられる。これは指導なしで自然に出てきたものであるが、3名とも直接引用の使用には増加傾向が認められ、今後注目に値すると考えられる。

3.2.2 滞日経験4年の研修生の場合（OPI：上下 筆記2級：91%）

1993年から1997年までの約4年、大学留学による滞日経験がある研修生の場合、指導前にす

上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析

でいくつかの言語的評価装置の使用が認められる。まず、「たら/そしたら」が4箇所（表4/節番号9、17、19、32）あり、引用動詞なしの直接引用も1箇所（表4/節番号21）使用されている。また、文体は不統一であるが、くだけた会話表現も見受けられる。

指導後の変化を見ると指導前に使用されていなかった、HPIは2箇所（表5/節番号22、23）使用されており、ここでは2度同じせりふを繰り返していることから、意識的な使用ではないかと思われる。ここでのHPの使用は、話のクライマックスでの効果的な使用であり、インプットが有効に働いた可能性がある。擬音語・擬態語としては、ドアをしめる音が「パン」から指導後には「バタン」に変化している。これは、筆者が発表前にこの研修生から、「車のドアを閉める擬音語はどういいますか？」と聞かれたことから、日本語の擬音語として意識して使用したことがわかる。また、「たら/そしたら」に関しては4箇所から8箇所に増えている（表4及び表5参照）。しかし、必ずしも話の展開上適切な使用とは言えず、やや過剰使用の傾向が認められる。例えば、表5/節番号9の「～たら」は、テ形接続がより適切であるし、表5/節番号20の「～たら」はテ形接続をするか、「なんだか～変だなと思ったんですよ。」と一旦、文を切って、「それで」で21に繋げるべきだと思われる。指導前は、表4/節番号18「思って」、21「マールさん、忘れてしまった」（引用動詞なしの直接引用）となっており、誤用でなかった部分なので、指導後の発表では、インプットされた評価装置を意識的に使用しようとして、かえって誤用を招いてしまった例ではないかと思われる。また、1箇所だった直接引用は4箇所に増えた上、「忘れてしまった」（表4/節番号21）が「忘れちゃった」（表5/節番号24）になるなど、音の変化（融合）も見られ、全体的にくだけた会話表現になっている。その他の文法面での誤用としては、指導前及び後の「本がたくさんおいてたから」（表4及び5/節番号29）は「おいてあったから」とすべきところである。

3.2.3 滞日経験20年の研修生の場合（OPI：超 筆記2級88%）

日系人で、夫が日本人というこの研修生の場合は、0歳～10歳までを日本で過ごし、その後もたびたび来日し、計20年近くの滞日経験がある。指導前の評価装置の使用は、8箇所の直接引用（すべて引用動詞あり）以外はあまり見られないが、文法面、語用論面での誤用もなく、経験談の構成もしっかりしている（表6参照）。

指導後の発表では、様々な項目で顕著に変化が認められる¹⁰⁾（表7参照）。指導前にはHPの使用が無かったのに対し、指導後、一気に4箇所（表7/節番号23、24、31、38）使用されており、かつ、「たら/そしたら」の使用が2箇所から5箇所（表7/節番号10、15、16、25、30）に増えている。またこれらは、3.2.2の研修生で見られたような過剰使用ではなく、文法的にも正

しく、かつ、話の展開場面や、クライマックスでの、臨場感あふれる評価装置としての適切な使用であると言える。その他にも8箇所から12箇所にふえた直接引用（思考も含む）では、引用動詞のないものも3箇所（表7/節番号17、26、28）ある。いずれも話の展開場面やクライマックスでの効果的で適切な使用であり、過剰使用ではない。また、この研修生の場合は、インプットした評価装置以外の変化も非常に多く見られる。全体的に指導前の録音ではフォーマルなスピーチスタイルであったのに、指導後の発表では、かなりくだけたインフォーマルな会話表現になっている。それらを以下に列挙すると、

- ・インフォーマルな会話に使用される接続詞「で」が0箇所から3箇所へ増加（表7/節番号11、21、22）
- ・「～と（言った。）」などの引用の接続詞「と」が「～って」や「～なんて」に変化
- ・名詞止めが出現（表7/節番号2、15）
- ・指導前、「私は恥ずかしい気持ちで聞いていました。」（表6/節番号36）という表現が、指導後「もう恥ずかしくて恥ずかしくてどうしようもない。」（表7/節番号37～38）と変化。会話において聞き手に対する働きかけを強くしたり、リズムをよくするために使われる「繰り返し」（『なめらか日本語会話』p66参照）の効果と日常会話で感動詞としてよくもちいられる「もう」が効果的に使われ、聞き手をひきつける表現となっている。
- ・感情や判断の直接の表明を抑制する様子をあらわす副詞「まあ」（『現代副詞用法辞典』参照）の使用（表7/節番号33）。「まあ」や上記「もう」は国立国語研究所（1955）でも日常談話使用頻度の2位にあげられており、日本語母語話者の談話に多く使用されている。

このように、この研修生の場合、授業でのインプットがインフォーマルな会話表現への変化や口頭ナラティブ能力としての評価装置の効果的使用を促すきっかけとなったのではないかと考えられる。

4. 考察・提言

『日本語教育事典』によると、上級の口頭表現能力とは、「日常会話の話す能力の上に、授業、演習、座談会、討論会などで、抽象度の高い内容について口頭発表する能力」（p634）であるとされている。当センターに限らず、従来の上級日本語学習者の会話指導は、日本の社会問題を扱うことよって、トピックの抽象度を上げ、かつフォーマルな場面における言語活動を扱うことよって、抽象度の高い語彙や表現力を学習、習得させる方向にあったといえる。それは、上級日本語学習者用の教科書で口頭能力にも焦点を当てている教科書（例、『日本を話そう』『過渡期の日本を考える』『日本社会探検』）にも共通していることから裏

上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析

付けられる。しかしながら、今回扱った自分の経験談を話すという言語活動は、抽象度よりもむしろ具体性が高いと言え、また、雑談というインフォーマルな場面を扱ったという意味でも、従来と逆の方向にある。

李(2000)は、上級日本語学習者の会話能力に関して、外国語を話し言葉として使うことに関する知識、およびその知識に基づいて会話を行う能力の欠如をあげている。この能力とは、「語彙・文法とは違う範疇のもので、語彙・文法を実際に運用する際に直面しなければならない、会話参加者たちがどのように相互に働きかけあうかに関するもの」(p.246)であるという。李の場合、この能力とは会話管理に関する能力のことをさしているが、「会話参加者による相互の働きかけあい」に必要とされるという点に関しては、評価装置の使用も同様に必要な能力の一つであると思われる。また、Eggs & Slades(1997)は、第二言語あるいは外国語教育としての英語教育においても、雑談というインフォーマルな場面に使用するだけでた会話表現に関して、生活の中での使用頻度が高いにもかかわらずあまり注目されていないこと、またその教材も不足していることを指摘しているが、同様のことが日本語教育にも言えるであろう。

おわりに

今回、3人のケーススタディーを通して、学習者に日本人の経験談の談話分析をさせることにより、日本語の言語的な評価装置に注目させることができ、かつその使用を促す可能性があることが分かった。しかしながら、3.2.1の研修生のように、日本滞在の短い研修生の場合、指導前と後での変化は、HPを1箇所使用しただけで、ほとんど変化がなかったことを考えると、評価装置の使用の指導以前に、文法、語用面や、インフォーマルな場面でのだけた会話表現の指導が必要な学習者もいることは、特記に値する。

また、今回の調査では、データの少なさという点や、ナラティブ録音時の指導前、指導後での状況の差(注10参照)という欠点があり、改善が必要である。今後は、データの量を増やすことにより、上級日本語学習者の評価装置の使用と、滞日経験の間には本当に相関関係があるのか、その他の要因は無いのか、今回の結果の妥当性を見たい。さらには、日本語のインフォーマルな場面でのだけた会話の指導をどのように行うか、その際、他にどのような教室活動が考えられるかも今後の検討課題であると思われる。

〔注〕

(1) 当センターの多国籍短期研修では、口頭運用力を測るものとしてACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages)のOPI(Oral Proficiency Interview)を、その他の知識や運用力を

測るものとして日本語能力試験の2級と3級を合わせたもの(400点満点、2級と3級の割合はほぼ均等)をプレースメントテストとして実施している。

(2) 松村はHPについて、「日本語では基準時を容易に発話時から過去時に移すため、(中略)歴史的現在を用いただけでは、劇的效果は出にくい」としており、むしろ、擬音語・擬態語や動詞句を省略した直接引用が評価装置として機能しているという見解に達している。

(3) 評価装置の全体像については、Labov(1972)、Polanyi(1979、1985)等を参照のこと。Bamberg&Damrad-Frye(1991)によると、評価装置の適切な使い方は、大人になってから習得されるという結果が出ている。

(4) 日本語能力試験の2級レベル相当問題が何パーセント得点できたかという数値を示す。

(5) 蓮沼(1993)によると、『『たら』は、話し手が実体験的に新たな事態を認識するといった文脈を要求するものなので、外部からの観察者として事態の生起を客観的に叙述するような文脈では用いられない。このような文脈では、『たら』ではなく『と』が使用されることになるのである」とある。また、蓮沼は「たら」の意外性は、「念のため明解国語辞典を引いてみたら、案の定違っていた」という様に、意外ではない文脈でも「たら」が使えることから、絶対的な意味特徴ではないとしているが、蓮沼の言う「たら」の「話し手の実体験的な新たな事態の認識」という性質が多くの場合、意外性や臨場性につながっていると思われる。

(6) 「ごきげんよう」というテレビ番組からとったもの。与えられた課題(例、恥ずかしい話、怖い話など)にそって女性ゲストにより話されたもの。

(7) 全員が課題をこなしており、すぐれた感性のものが多く、英語と日本語ではなく母国語で作った研修生もいた。以下研修生からの傑作を一部紹介する。「家を出る時はキュート、家に帰るとバタンキュー」「お金をもらうのは、キャッチ、お金を使わないのは、けち」「牛肉はステーキ、私は素敵」

(8) くだけた会話表現とは、雑談のようなインフォーマルな場面で、丁寧ではない表現で話す時の文体をさす。常体、普通体などとも表現されるが、特に口語で終助詞を伴うものや、

「ている」が「てる」になるような融合形や、調音がぞんざいになって、「それで」が「ほいで」になるような音変化が多くおこるものをさす。

(9)「 」と言った。というように実際の発話を引用して談話を進めるもの。下線の引用動詞は省略される場合もあり、その場合は、より臨場感が高まる。

(10) 講師が「雑談で話すように」と指示し、モデルを提示したにもかかわらず、指導前のナラティブがインフォーマルな会話体になっていないのは、録音の時の状況が自室で一人で行なわれたことにも一因があると思われる。また、評価装置使用の増加も、この指導前、指導後の録音時の状況差が原因で起こったことも十分考えられ、その場合研修生は、すでに評価装置を習得済みと考えることもできる。

【参考文献】

- 鮎沢孝子 (1988) 「『話し言葉』の特徴 - 聴解指導のために - 」『日本語教育』64号 日本語教育学会 1 - 12 .
- 小玉安恵 (1998) 「日本語のコンパセーションナラティブにおける時制転換」 『日本語国際センター紀要』8号 国際交流基金日本語国際センター 1-17.
- 国立国語研究所 (1995) 『談話の実態』国立国語研究所 報告8
- 櫻井千佳子 (1996) 「ナラティブにおける時制の使い分け - 発達の段階から見た日本語と英語の比較対象研究 - 」 日本言語学会秋季大会研究発表
- 塩崎紀子・田中久美子 (1998) 「中・上級口頭表現能力養成の試み」『日本語と日本語教育』25号 慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター 43 - 71 .
- 日本語教育学会 (1982) 『日本語教育事典』大修館書店
- 蓮沼昭子 (1993) 「『たら』と『と』の事実的用法をめぐって」『日本語の条件表現』益岡隆志編 73 - 97 .
- 飛田良文・浅田秀子 (1997) 『現代副詞用法辞典』大修館書店
- 保坂敏子 (1997) 「上級口頭表現能力養成方法の多様性-コース設計の基準を-」『日本語と日本語教育』第26号 慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター 41-42
- 松村瑞子 (1995) 『日本語の時制と相』階文社
- 李 麗燕 (2000) 『日本語母語話者の雑談における『物語』の研究 会話管理の観点から』くろしお出版

- Bamberg, M. and D. Damrad-Frye. (1991). On the ability to provide evaluative comments: Further Explorations of children's narrative competencies. *Journal of Child Language* 18, 689-710.
- Eggin, Suzanne and Diana Slade (1997) *Analyzing Casual Conversation*. London, Washington: Cassel.
- Gulich, Elisabeth and Uta M. Quasthoff. (1985) Narrative Analysis. In Van Dijk, Teun (eds) *Handbook of Discourse Analysis Vol. 2 Dimensions of Discourse*. 169-97. Academic Press.
- Kodama, Yasue (2000) Functions of timeless sentences in Japanese oral narrative. Unpublished Manuscript.
- Labov, William. (1972). *The Transformation of Experience in Narrative Syntax*. Language in The Inner City Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Okazaki, Shoko (1995) Ellipsis in Japanese Conversational Discourse. Ph.D Dissertation Georgetown University.
- Polanyi, Livia (1979) "So What's the Point?" *Semiotica*, 25(3-4), 208-24.
- _____ (1985) *Telling the American Story*. Ablex Publishers Corporation. Norwood, New Jersey.
- Schiffrin, Deborah (1981) Tense Variation in Narrative. *Language*. 57, 281-303.
- Takahashi, Kazumi. (1996). Mechanism of Tense Switch in Japanese Oral Narrative: (Re)Enactment / Recollection and Involvement / Considerateness. Ph.D Dissertation. UCLA.
- Yamada, Masamichi (2000) Negation in Japanese Oral Narratives: A Functional Analysis. Ph.D Dissertation. Georgetown University.

< テキスト >

- 『過渡期の日本を考える』1997 三牧陽子他 凡人社
- 『なめらか日本語会話』1997 富阪容子 アルク
- 『日本社会探検』1998 架谷真知子他 スリーエーネットワーク
- 『日本を話そう』1994 日鉄ヒューマンデベロップメント・日本外国語専門学校 The Japan Times

上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析

表2 滞日経験3週間の研修生の指導前のナラティブ

新番号	指導前	たら	HP
1	私はいくら考えても、		
2	皆さんに面白い話を思いつくことができませぬ。		
3	でもこの間起こった面白いことを話したいと思います。		
4	私は、先週の土曜日と日曜日、先生と一緒に海へ行きました。		
5	土曜日は、海は静かでしたけど		
6	台風の影響で、日曜日は波が高くなりました。		
7	でも天気はよかったですから、		
8	泳ごうと思って、		
9	キルギスの大学生と一緒に泳ごうと思って、		
10	海に入りました。		
11	私は帽子とメガネがありました。		
12	普通の帽子ではありません。		
13	メガネではありません。		
14	泳ぐのを使えます。		
15	実はメガネじゃなくて、		
16	他の言葉ですけど、		
17	その言葉がわかりません。		
18	すぐ、波に打たれて、		
19	何回も転びました。		
20	そして、耳の中に砂がとでも多かったです。		
21	私は、見てもらっても、		
22	帽子もメガネもありませんでした。		
24	もうさようならでした。		
25	私は、安心して自分の物を太平洋にあげましたから、		
26	もう一度ここへ来られると思いません。		
27	ロシア人は海に泳がなければ、また、その海岸に帰ることができると思っています。		
28	でも、あとでちよっと後悔して、		
29	私は、海岸に行きましようか。私の帽子とメガネは多分出てきて、私を待っているでしよう、といいました。		
30	友達と一緒に海岸に出ました。		
31	波はちよっと高くなりましたけど、		
32	泳いでる人も多かったです。		
33	私はまたメガネのことを思い出しました。		
34	メガネはどこに私を待っているかということを書き、		
35	すぐにメガネを見つけた。		
36	実は、私のメガネではありませんでした。		
37	たれかが落としたものでしたけど、		
38	私は驚きました。		
39	メガネと帽子がなければ、		
40	プールへ行くことができませんから、		
41	友達と一緒に普通プールへ行っ、		
42	楽しんでいましたから。		
43	でも、帽子は出ませんでした。		
44	一緒に遊んだ家族の奥さんは、私に自分の帽子をくれました。		
45	私の帽子よりちよっときれいな帽子です。		
46	また、友達と一緒にプールへ行っ、		
47	楽しみたいと思えます。		

表3 滞日経験3週間の研修生の指導後のナラティブ

新番号	指導後	たら	HP
1	私の話はつまらないですけど、		
2	この間起こったことです。		
3	多分一番面白いことの方がいいと思います。		
4	私は先週の土曜日と日曜日先生とキルギスの友達と海へ行きました。		
5	いつも、リーゼンと高さんと3人で、プールに行っ、		
6	あ=水泳帽をかぶっ、		
7	ゴーグルをかぶっ、		
8	水泳しましたから、		
9	同じように、あ=水泳帽をかぶっ、		
10	あ=ゴーグルをかぶっ、		
11	海を泳ぎました。		
12	あ=土曜日の天気はよかったです。		
13	静かでした。		
14	でも、日曜日台風の影響で、波は高くなりました。		
15	ちよっと危なかったです。		
16	でもみんな泳いでいましたから、		
17	私も、友達と一緒に海に入ろうと思っ、		
18	海に入りました。		
19	すぐに強い波で、波とぶつつかっ、		
20	転びました。@		
21	何回も転んで、		
22	あ=海から出て、		
23	水泳帽も、ゴーグルもなかったです。@@(@@@@)		
24	驚いて、		
25	あちこちを探っ、		
26	何もなかったことでした。		
27	最初にとでも、う=ん怒りました。		
28	あ=リーゼンと高さんとプールへ行けなくなりましたから、		
29	でも後でちよっと考えっ、		
30	ロシアの事情で、		
31	何か海に泳げたら、また、その海岸に帰ることができるといっ置置です。		
32	みんな借っています。		
33	だから、いいですね。		
34	私は、太平洋に自分の水泳帽とゴーグルをあげました。		
35	とでもいいです。		
36	でもまた将来のことを考えっ、		
37	帽子もゴーグルもないから、		
38	ちよっとプールに行きたいです。@@(@@@)		
39	それから、友達に借っ、		
40	「海岸に帰りますよ。多分私のゴーグルと帽子はもう海岸に出て、私を待っているでしよう。」		
41	帰りました。		
42	帰っ、		
43	また、「私のゴーグルはどこでしようか」。		
44	すぐゴーグルを見ました。		
45	でも私のゴーグルではありません。		
46	ちよっときれいな日本人が落としたゴーグルでした。(@@@@)		
47	私は、拾っ、		
48	でも帽子は歸りませんでした。		
49	でも、一緒に遊んだ奥さんは、ちよっときれいな帽子をくれました。@@		
50	だから、悪いことあるっ、		
51	すくいいことがある、取ると思えます。		

表4 滞日経験4年の研修生の指導前のナラティブ

節番号	指導前	たら	HP
1	私は、前、学校の近くに家を借りて、		
2	二人の同級生と一緒に住んでいたのです。		
3	一人は、ヘレンという英語の先生で、		
4	もう一人はマーラという音楽の先生です。		
5	車を持っていてるのは私だけなの。		
6	いつも二人を乗せて学校に行ったり、買い物したりしていましたよ。		
7	ある日、面白い事件があったのよ。		
8	伊勢丹にセールがあるという話を聞いたのは、放課後3人で買い物に行こうと約束をしたんですよ。		
9	それで、最後のベルがなかったら、		*
10	机を片付けて、		
11	車のほうに歩いていったんですよ。		
12	歩きながら、わたしはヘレンさんと生徒の話をし始めたんです。		
13	で、話が終わると、私とヘレンさんは、えっと生徒の話をし始めたんです。		
14	車に乗っても、		
15	話を続けましたよ。		
16	学校出て、		
17	5分くらい歩いたら、		*
18	なんだかマーラさんが静かだな~と思って、		
19	後ろ向いてみたら、		*
20	マーラさんが乗っていきなかつたことを初めて気がついたんですよ。		
21	「やほい、マーラさん、忘れてしまった。」		
22	でも、確かに後ろのドアがバンという音がしたんですが、		
23	二人は慌ててもう一人の家へ戻って行ったんですよ。		
24	でも、マーラさんは、もう一人の家に乗っていったそう。		
25	二人は何も謝ったんですよ。		
26	悪いな~と謝っていたからさ =		
27	マーラさんの話によると、		
28	車の右側のドアを開けてみたら、		
29	本がたたくさん置いてたので、		
30	ドアを開けて、		
31	左側のドアから乗ろうとしたんだそう。		
32	でも、私は、音だけを聞いたら、		*
33	マーラさんがすでに乗っていたら、		
34	走り出したのよ =		
35	あまりにも、ヘレンさんと話に夢中になってしまったので、		
36	マーラさんが後ろから悪いかけつけてきたことわづかからなかったのよ =		
37	ほかだね =		
38	マーラさんがかわいそうだったね。		
39	マーラさんに嫌われなくてよかったです。		

表5 滞日経験4年の研修生の指導後のナラティブ

節番号	指導後	たら	HP
1	えっと、私は前、えっと学校の近くに家を借りて、		
2	あの二人の同級生と一緒に住んでいたの。		
3	あの一人は、ヘレンという人で、		
4	英語の先生です。		
5	もう一人は、マーラという人で音楽の先生です。		
6	えっと、車を持っているのは、私だけだね。		
7	えっといつも二人を乗せて、どこかの学校に行ったり買い物したりしていましたよ。		
8	で、ある日面白い事件があったんですよ。		
9	伊勢丹にセールがあるという話を聞いたら、		*
10	「じゃー放課後一緒に行くね」と約束したんです。		
11	で、最後のベルがなかったら、		*
12	あの3人とも早く車を片付けて、		
13	車のほうへ歩いて行ったんです。		
14	で、歩きながら、私とヘレンさんは、えっと生徒の話をし始めたんです。		
15	で、話が、だんだん面白くなって、		
16	ん~車に乗っても		
17	まだ話を続けましたんです。		
18	で、それで、学校出て、		
19	5分くらい歩いたら、		*
20	「なんだかマーラさんがなんか変だな、静かだな」と思ったら		*
21	後ろを覗いてみたら、		*
22	マーラさんがいないの。@@@ (@@わすれちゃった)		*
23	そう、マーラさんがいないの。@@@ (@@わすれちゃった)		*
24	「マーラさん忘れちゃった」と思ったら、		
25	二人慌てて学校帰りました。		
26	でも、やっぱりマーラさんもう家に帰っちゃった。一人で、@@ (@@@@)		
27	マーラさんの話によると、		
28	後ろのドアの右側のドアを開けたら、		*
29	本がたたくさんおいてたから、		
30	もう一度ドア開けて、		
31	左側のドアから乗ろうとしたんだって。(@@@@@)		
32	でも私、後ろのドアの音? バタンと聞いたら、		*
33	マーラさんがすでに乗ってるとおもったから、(@@@)		
34	走り出したんです。@@		
35	何回も謝ったけど、@@		
36	うんでも、マーラに嫌われなくてよかったです。(@@@@@)		
37	本当の話です。		
38	2回もやりましたよ。(2回も@@@@@)		
39	同じ人で、(@@@@@)		
40	同じ話です。		
41	マーラさんは、なんかすごいスローでマイペースでいつか、うん、マイペースだから、@@		
42	乗ってるかどうかかわからなくて、もう。(@@@)		

上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析

表6 満日経験20年の研修生の指導前のナラティブ

前番号	指導前	たら	HP
1	スベイン語を勉強してたときの授業中におきことです。		
2	先生は、5ページにもなる練習問題を宿題に出されました。		
3	私は4ページしかしてませんでした。		
4	授業が終わる15分前ころ、私は、「あー神様仏様、私の番が来ませんように」とお祈りしてました。		
5	そうしたら、突然、先生が私に聞きました。		*
6	「パトリシアちゃん頑張って何ですか、日本語で向ですか、」と聞かれました。		
7	え=聞かれた言葉はブラジルでは、乾杯をするときにいう言葉です。		
8	私は、返事に困って、		
9	その先生が男性でしたので、		
10	えっと、「あなた、あなたの体にはあるもので、私の体にはないものです。」と返事をしました。		
11	え=大変いをして、		*
12	そうしたら、クラス中、クラス中の生徒たち、え=みんな大人です。		
13	もってジョークを続けるようにしていました。		
14	多分彼らも宿題をしてなかったんだと思います。		
15	それで、別の話をしました。		
16	娘が通っている学校は、幼稚園から中学校までありますが、		
17	創立者は日本人です。		
18	けれど、校長先生は、ブラジル人です。		
19	先生方も日系人やブラジル人です。		
20	生徒たちは90%が日系人の学校です。		
21	あるとき、自衛隊がブラジルへいらしたとき、		
22	その学校を訪問することになりました。		
23	それで、生徒たちは、コーラスで歌を歌うことになりました。		
24	娘は家で、歌の練習をしていたのですが、		
25	「チンチンチンハイヨドルーワ」とこんな歌を歌っていたのです。		
26	私は、そんな歌をコーラスで自衛隊の人たちにきかせるかですか、とちょっと変に聞きました。		
27	それで校長先生に話に行きました。		
28	「その歌はあんまりよくないので別の歌にしたほうがいいのではないですか」		
29	内容までは説明しなかったのですが、		
30	「その歌はイタリアの歌で、ブラジルの歌ではないと思いますので、とだけしらが書かれました。		
31	それなら、校長先生は、「いいえ、その、この歌は、60年代1960年代ぐらいに、スエリカンペーロという歌手が歌って、とてもヒットした歌です、ブラジルでヒットした歌です」といって、		
32	それでコーラスで歌うことになりました。		
33	ま、別の歌も歌いましたけれど、		
34	この歌が歌われたとき、		
35	自衛隊の人たちがくすくす笑っていました。		
36	私は、本当に恥ずかしい気持ちで聞いていました。		

表7 満日経験20年の研修生の指導後のナラティブ

前番号	指導後	たら	HP
1	私がスベイン語を勉強してたときのことなんです。		
2	先生は男性の先生。		
3	これよく聞いてくださいな。		
4	これがポイントですか。		
5	え=先生は5ページの宿題をもう2、3日でする宿題を出されたんです。		
6	私は、4ページしかしてなかったんです。		
7	そして、4ページまであの一斉たときに、		
8	あと1分という時間がありました。		
9	それで、「あ=神様仏様、私の番が来ませんように」とお祈りしてました。		
10	それなら、突然先生が、「パトリシア、あんちがって日本語で何ですか、」と聞かれました。		*
11	で、その言葉は、ブラジルでは、乾杯をするときにいう言葉なんです。		
12	こうコーラスを上げて歌うんですよ。		
13	それで、私は、返事に困って、		
14	「えっと先生の体についているもので私には無い物です」と答えました。@@@(@@@@)		
15	それなら、クラス中が大笑い。@@ (@@@)		*
16	そして、また、聞かされたために、「えっと、そのような間違えた話があるんですけど、ジョークがあるんですけど」とって言った。		*
17	「もってジョークもってジョーク」		
18	多分彼らもあの宿題をしてなかったんだと思います。		
19	それで、私は話を続けました。		
20	え=娘のこゝ通った学校、そこは、幼稚園から、えっと創立者が日本人で校長先生はブラジル人です。		
21	で、幼稚園から中学校まであります。		
22	で、で、娘が幼稚園時代のころ、え=日本、日本から自衛隊がみえることになりました。		
23	それで、娘はそのコーラスで、歌を歌うって言うので		*
24	家の中で「チンチンチンハイヨドルーワチンチンチンハイヨドルーワ」なんて歌っててたんですよ。(@@@@)		
25	「あ=まあ何ていう歌なの？」って私が聞いたら、		*
26	「だってこれ、コーラスに歌うかですか(@@@)自衛隊がみえるから、もうとっても上手にうたわれないといけ		
27	ないのよ。」		
28	「まーそんな歌」と私は、学校に聞かされた。		
29	校長先生に、「そんな歌やめてください。(@@@)		
30	訳はちょっと恥ずかしくて言えなかったんですけど、		
31	「その歌は60年代にイタリアで流行った歌だと思ってるんですけど」と言ったら、		*
32	先生は「いいえ、この歌は、ブラジルでも流行りました。スエリカンペーロという歌手が歌ってました」とどかん		
33	はるんですよ。		
34	それで、私、もうそれ以上がらほってま仕方ないんで、		
35	ま、家に帰って、		
36	「まあ、どうかなるでしょう」と思って、		
37	その当日、当りやなくて当日、当日みなさんが歌ってるとき、		
38	やばい自衛隊の人ばかりくすくす笑っていました。@@		
39	私ももう恥ずかしくて恥ずかしくて、		*
40	どうしようもない		
41	でも娘が後の方にすわってていて、聞いて		
42	彼女の顔が臭えなかったんで、		
43	まー一応安心しました。		
44	そういう話です。(@@@@!!!!)		